

邪馬台国論

「唐津上陸説に根拠はあるか？」

2021年9月

丸地三郎

「邪馬台国の探し方」 (2021年3月27日レポート)

- 位置・距離・方位だけでない探究要件
 - ✓ 距離・方位で邪馬台国を、300年、探してきたが、見つからない。
 - 何を考慮しなければいけないのか？
 - どんな要件を満たしたら、その位置が目的地と認められるのか。
 - 良く調べ、素晴らしい洞察力が有っても、邪馬台国は見つからない。
 - なぜ、この人たちが、探せなかったのかと残念に思うケースがある。
- 探し出すための要件を見直してみることも、必要と考えます。
- 下記の項目について、提言
 1. 魏志倭人伝とその外の「中国史書」の倭人伝・倭国伝の関係
 - 邪馬台国 VS 邪馬壹国
 2. 魏の公式使節
 - 倭国の対応・待遇 • 公式使節の規模/人員
 3. 「王宮に行かず、王に面会しなかった」 論…… 有り得るのか？
 4. 船舶・運輸・旅程の常識
 5. 古地図
 6. 人口推定
 7. AB二か所で同一物件発見 何と理解するか $A \Rightarrow B$ $B \Rightarrow A$
- 課題
 - 唐津上陸説に根拠は有るのか？
 - 九州上陸地点は何処か？

漢・三国時代の時代の外交使節の概要 (2021年3月27日レポート)

魏の使節(240年:梯儁)の使節の人員数・規模・体制は、邪馬台国の研究に際しては、基礎的な情報として、把握する必要があるものとする。その[参考](#)とするため中国の事例を検討する。

- 漢の時代の例：
 - BC140～135年 [張騫](#)(チョウ ケン)の大月氏国へ訪問 [人員100名](#)
 - BC119年 [張騫](#) 西域の烏孫へ訪問 [人員300名](#)
(1名あたり、馬2頭、牛・羊数万匹、外に贈呈用金銀布帛)
 - 三国時代の呉の例
 - 230年:孫権は、二將軍に命じ、[1万人](#)を率いて、夷州・亶州を探索。
 - 二將軍はたどり着けず。(死罪)
 - 233年：孫権は、公孫淵を燕王に冊封する[使者\(兵1万\)](#)を送る。
 - 西域へ砂漠を行く張騫の例では、百人単位、しかし、牛・羊数万頭との記述は、規模としては壮大。
 - 同時代の呉の使節は、船舶で移動する使節では、万人の単位。
- 魏の使節の場合は、この呉の例が参考となると思われる。
 - 初回の訪問：[人員は最低でも500名。数千名規模と推定する。](#)

初回倭国へ派遣された使節団の概要を推定する (2021年3月27日レポート)

- 魏の使節は、**新旧の詔書と金印紫綬**、更に**財宝(贈呈品)**を持ち、無事に相手に授与し、**友好関係を確立し**、更に、**倭国に関する報告書**を作成し、確実に戻り、**報告をすべき立場**にいた。
 - 安全確保
 - 呉の使節も行けなかった未知の地域の国へ行く
 - 航路の危険、(風・嵐・海流・潮流・浅瀬・岩礁・地図)
 - 航路途中の国々の危険(停泊地の安全、水・食料の補給)
 - 敵の呉及び呉の協力国の襲撃、等
 - 友好関係の構築
 - 人材・贈呈品などの準備(嗜好品・装飾品・音楽・舞踊・衣類等)
 - 情報調査能力・人材の配置
 - 中国の辺境の風俗習慣を知る人材
 - 植物・動物などに精通した人材
- 呉の例(1万人)を考慮し、推定する。
 - **その規模は、使節団として、1千人**
 - **船舶の操船と警護の兵員2千人 合計人員 3千人**
 - **船群は、100人乗りの帆船を主として、30～50隻ほど**

魏の公式使節(正始元年:240年)の倭国の対応・待遇

(2021年3月27日レポート)

- 魏の公式使節は
 - 「事あらば、邪馬台国を武力侵攻する」下心があり、偵察を兼ねている。
 - 邪馬台国側は、武力侵攻の基礎データである距離・方位などを把握できないように、留意した。
 - 判り難い道を選び、道案内した。
 - だからと、旅程・距離・方位は判りにくい。
 - 倭人(邪馬台国)から、そんな疑心暗鬼の待遇を受けたのか？
- では、**どのような待遇を受けたのか？**
 - 外交交渉なので、魏と邪馬台国の双方の動き(記述)をみる必要がある。
 - 卑弥呼の使者が、魏を訪問し、魏の王朝から受けた待遇は、
 - **最恵国待遇**。それ以上かも知れない。
 - 大量の豪華な贈り物を邪馬台国へ送り、それを、人々に示し、渡すようにわざわざ言っている。
 - 魏の王から、親魏倭王の称号とそれを証明する金印紫綬を、直接、女王に渡すための使節を訪問させると宣言している。
 - 邪馬台国側は、
 - **豪華な贈り物を持ち帰り、魏王朝のメッセージと使節来訪予定を伝えたはず。**
 - 魏の公式使節の受け入れ態勢を、国として、検討したはず。
 - 魏志倭人伝の記述を読むと、対馬・壱岐の対応は、島(クニ・村)の中を案内し、生業・暮らし振り伝え、島の長・副官が対応し、島を挙げての対応であったと見える。
 - ✓ 後に、狗奴国との紛争の際に、応援を求めた事も、緊密な関係を構築した結果と見える。
 - **邪馬台国側も、最恵国対応を行ったはず。**
 - 魏の使節の訪問が順調に進むように、途中の国々にも、事前の連絡を入れ、準備させたものと理解します。

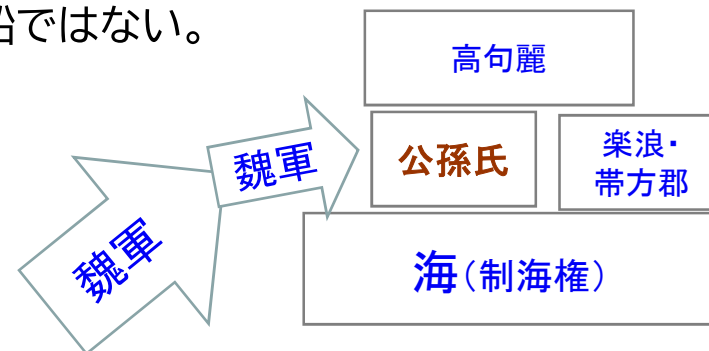
魏の公式使節のコース選定

(2021年3月27日レポート)

- そのコース取りは、邪馬台国側が情報提供し、倭国内は、「最善のコース」を進めたものと見る。
 - 魏にとっては、初めての、未知の国への訪問であった。
 - 500名～数千名規模の公式使節を効率よく・安全に到着させることを念頭に。
 - 邪馬台国側は、水先案内人を付け、先導する船舶を付けたとも推測する。
- 最善のコースとは、どんなコースか？
 - 女王の宮殿が最終目的地
 - 魏の使者の目的は女王への面会と書面・金印などを渡すこと。
 - 最も安全なコース。
 - 魏又は帯方郡を訪問した倭の使節の帰国ルート。
 - 最終到着港は、最も栄えた港。
 - 陸路は、最も整備された、危険の少ないコース。
- ✓ コース設定に際して
 - 魏の使節(帯方郡の役人)とコースについての協議が行われたと見る。
 - 事前に、コースの「距離数」と「所要日数」を伝え、合意を取っていたはず。
 - 受け入れる側の倭の役人にとっても、魏の役人にとっても、成功には欠かせない打ち合わせだったはず。
- ✓ 船舶の航海能力・サイズは、コース取りの重要要素
 - 帆船と手漕ぎでは、到達距離が違う
 - 魏の最も優秀な船舶が選ばれたはず。
 - 船群 : 大切な任務を持つ場合、1隻では運用しないのが原則。

• 使節の訪問コース選択の要件

- 魏の使節の使用する船舶。
- 一国の公式使節であるため、魏の搭乗船は、魏の最も優れた船舶と考える。
- 魏の北側の海: 黄海を通り、朝鮮半島と更に未知の倭国へ行く最適な船舶は？
 - 237年(景初1年) 魏は毌丘儉の軍勢を出し、公孫淵を挑発、反旗をひるがえさせた。
 - 237年 青・エ・幽・冀の四州に命じ大いに海船を建造させた。
 - 景初年間 (237年景初1年と推定) 大船で軍を密かに渡海させ、公孫氏に占拠されていた楽浪郡・帯方郡を回復。東側から公孫氏を抑えた。
 - 景初中、大興師旅、誅淵、又潜軍浮海、收樂浪、帶方之郡
 - 238年1月 魏の司馬懿仲達が公孫淵討伐に出立
高句麗は、魏の要請に応じて数千の兵を派遣(東夷伝)
 - 238年8月の公孫氏を討伐。
- その海船は、北の海で、外洋航海できる最も優れた船だったと考える。
(勿論、手漕ぎの船は有りえず、大型の帆船となる。)
- 魏の使者は、絶対に、倭の使節の船に同乗させてもらうことは無い。
 - 倭国の船は、もちろん帆船であった。手漕ぎの船ではない。



➤ 船舶概覧 | 中国四大古船 2017-02-19 由 海洋探秘 發表于 歴史 <https://kknews.cc/history/p85m2gz.html> 訳責丸地

- **沙船**は、中国の古い海船の船型の一つで、浅い水深に適合し、海難の多い航路を航行し、この沙船と云う名を得た。南北朝時期(439年～589年、隋が統一するまでの期間)に、朝鮮と日本へ航行する船はこの種類。唐・宋時期に、基本的な発展があり、型が定まった。明代に至り「沙船」の名称と成った。
- **沙船**は船底が平で、吃水が浅い。潮が退いた時にも浜に平らに置くことができ、浅瀬に強い**平底船**と言われた。沙船は、長江の河口以北の特に江蘇省の沿海および渤海の水深の浅い海域で用いられた。沙船は、一般的には、**帆柱が5本有り、長方形の縦帆**を掛ける。**船の両舷に披水板**を用いることがある。(横流れ防止用) **舵は昇降が可能**。水深が浅い海域にあっては、披水板と舵を共にも上げることになり、オールで推進し、櫓で操縦する。水深の深い所に到着すると帆走する。船は、舵と風下側の披水板を船底より下に降ろす。これをもって高い操舵性を持ち横流れを回避する。又、**向かい風の帆走の航行能力も向上する**。20世紀に至っても、60年代には中国沿岸では、少なからずの数の沙船があった。

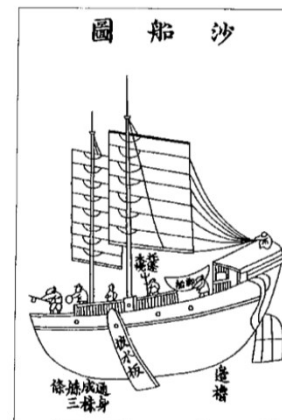
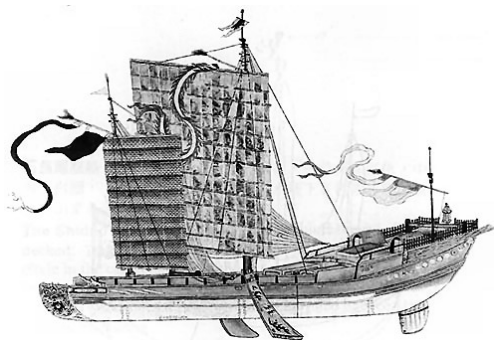
➤ 中国古代的戦艦 2016-12-08 由 煮酒君談史 發表于 歴史 <https://kknews.cc/history/jvejr66.html> 訳責丸地

- 歴史を振り返ると、現代の中国の造船業界は世界に遅れをとってるが、古代の中国の造船業界は、常に世界をリードしてきた。
- 余姚市、浙江省の考古学的発見によると、中国の造船業の現在の歴史は7000年以上も続いています。**春秋時代と戦国時代には、造船業はすでに一定の規模を持っていた**。当時、越国家の水軍には特別な造船所、船の宮殿がありました。漢王朝では、州が設立した大規模な造船工場では、様々な種類の軍艦、公用船、航海船を生産することができた。

5帆柱の沙船

- 沙船はまた「四角い船頭・船尾」と言って、船頭・船尾の甲板が広々と高い、船体は深くて小さくて、吃水が浅くて、後部は船尾が水面を出ている。吃水の浅さと四角い船尾が水の抵抗の抵抗力の大きい欠点を補う。その船体が大きいため、より多くの帆柱を設けることができ、より多くの帆で、流れに逆らって舟を航行させることができます。船倉は防水隔壁を採用して客室をあけて、沈没しにくい性能を発揮。多くの貨物を積載、海船と軍艦はこのような船型を用いる。**沙船は殷商時代にその原形が現れ、後世の絶えざる進歩を通じて宋の時に普遍的になり、制作技術が定型化した**。

歴史の海を走る 中国造船技術の航跡 図説中国文化百華



- 旅程の計画段階で、魏の使節が知るべきこと。

- 概略の行程

- 経由地
 - 距離(経由地間)
 - 所要日数

- 危険度

- 装備・軍備



陸地
浜辺

- 船と陸行

- 船便を使うときの常識

- 船への積み込み・積み下ろしが、海運の最大の問題
 - 現代ではクレーンの設備のあるヤードならば、直接荷揚げ可能
 - 古代～近代：最も人手が掛り、時間と労力を要するコストの高い作業
 - 船倉から人手で甲板に → 舢舨に → 港へ移動 → 舢舨から人手で陸上へ
 - 積み込み・荷揚げは、最小回数（途中で下ろし、再度積み込むことは有りえない。）

- 目的地に一番近い処まで、船で行くこと。

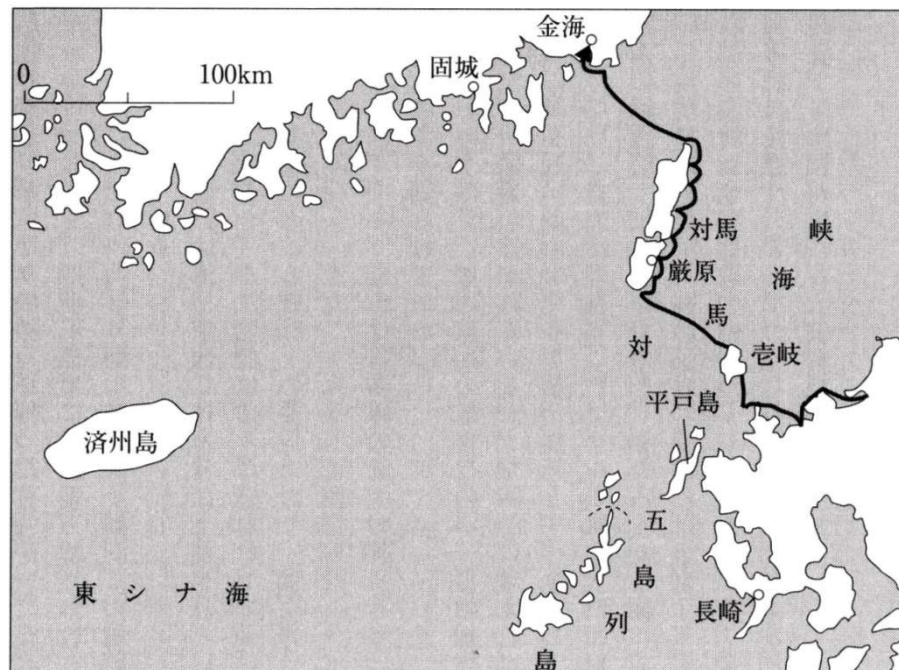
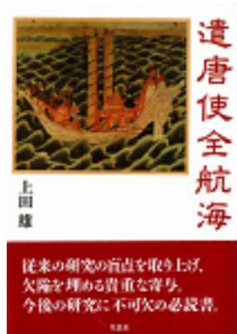
何処へ 上陸？



- ・ 唐津上陸の理由が無いのならば、何処へ上陸したら、良いのか？

遣唐使・神功皇后の例では？

- 神功皇后の渡海ルートを経験から調査した本がある。
 - 博多湾の香椎から出発し、唐津・呼子付近を経由し、壱岐に渡った。
 - 帰路は、壱岐を出発し、暴風雨に会い、糸島半島に漂着、香椎に戻った。
- 遣唐使の当初6回は、半島沿いに航行する北路を使用。
 - 帰国は、判明する全てが筑紫＝博多湾に戻った。
- 文献に残る航海のルートは、
 - 往路は、博多から唐津・呼子を経由して、壱岐・対馬へ
 - 帰路は、博多へ これが一般的ルートと見られる。



8	7	6	5	4	3	2	1	回	遣唐使船の船番号と乗船人員数	
藤原馬養 大伴山守 多治比県守	坂合部大分 栗田真人	河内鯨 坂合部石積	守大石 津守吉祥	坂合部石布 河辺麻呂	高向玄理 高田根麻呂	吉士長丹 高田根麻呂	犬上御田相	使節名	船番号	人数
第四船	第三船	第二船	第一船	第一船	第一船	第一船	第一船	?	1	2
139	推定 各船に					120	121			
557						241				
養老一	717	702	669	665	659	654	653	630	出発年	
南路	南路	南路	北路	北路	南路	北路	北路	北路	往航路	
		楚州	楚州	越州	■南海の島に漂着	萊州	萊州	■薩摩の曲	着地	
南路	南路	南路	北路	北路	南路	北路	北路	北路	帰航路	
養老二	718	707	?	667	661	655	654	632	帰国年	
		筑紫	筑紫	筑紫	濟州島經由	不帰	筑紫	對馬	帰国地	
					5人	往路で115人水死	121人	對馬	帰国者数	
	今回の使人略闕乏なし	帰途に一旦遭難か?	平高麗慶賀使	唐使劉德高等を送る	唐使劉仁願を随伴	唐使高表仁を随伴	唐使高表仁を随伴	唐使高表仁を随伴	備考	

魏の使節の上陸地

- 沢山ある邪馬台国論では、上陸地点を唐津又は唐津近辺の呼子・名護屋としているが、その根拠は？
- 唐津説の根拠
 - 壱岐島から最も近い
 - 上陸した末盧国の地名が、発音から、松浦(マツラ)に近い
 - 新井白石の地名による比定以来、定説となった。
- 唐津近辺以外の説
 - 半沢栄一著「邪馬台国の数学と歴史学」2011年1月発行 博多説
 - 上陸地は、西新町遺跡付近＝百道浜付近
 - 高木彬光著「邪馬台国の秘密」昭和48年12月(1973年) 宗像・神湊説
- 新井白石の 地名による比定
 - その根拠は、日本書紀に記載された神功皇后記中の鮎を釣る話の中に
 - 「梅豆邏国」「今、松浦と謂ふは訛れるなり。」
 - 古事記にも、神功皇后の記述の鮎を釣る話の中に「末羅国」が出る。
 - その根拠について確認する。

何故 唐津に固執？ 末盧＝松浦 ？

- 神功皇后が鮎を釣った玉島の里と云う土地が、日本書紀・肥前風土記には松浦県と、古事記に末羅県として記載されている。末盧＝末羅＝梅豆羅＝松浦 として、地名の発音の類似から、唐津説が定説となった。

✓ この説に疑義がある。

- 日本書紀の記述** (日本書紀(二)坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注 岩波文庫)

夏の四月の壬寅の朔甲辰に、北、火前国の松浦県に至りて、玉嶋里の小河の側に進食す。是に、皇后、針を鉤を為り、粒を取りて、餌にして、裳の縷を抽取りて、川の中の石の上に登りて、鉤を投げて祈ひて曰はく、「朕、西、財の国を求めむと欲す。若し事を成すこと有らば、河の魚鉤喰へ」とのたまふ。因りて竿を挙げて、及ち細鱗魚を獲つ。「希見しき物なり」のたまふ。希見、此を梅豆邏志と云ふ。故、時人、其の処を号けて、梅豆邏国と云ふ。今、松浦と謂ふは訛れるなり。

夏・4月1日、北にある、肥前の国の松浦郡に来て、玉嶋里の小川のほとりで食事をする。この時、神功皇后は、針を曲げて、米粒を餌にして、着物の裾から糸をとって、川の中の石の上にのり、針を投げて、祈り言った。「私は西にある宝の国を求めたいと思う。若し、是が成功するならば、川の魚よ、針を喰え！」竿を挙げると、鮎が掛かっていた。この時、皇后は、「珍しいことだ」と云った。このことから、この土地を「めずらの国」と云う。今、松浦と云うのは、これが、訛ったものだ。

- 古事記の記述** (古事記 倉野憲司校注 岩波文庫)

その懐妊みたまふが産まれまさむとしき。すなわち御腹を鎮めたまはむとして、石を取りて御裳に纏かして、筑紫の国に渡りまして、その御子は生れましつ。故、その御子の生れましし地を号けて宇美と謂ふ。またその御裳に纏かしたまひし石は、筑紫国の伊斗(いと)村にあり。また筑紫の末羅県の玉島里にいたりまして、その河の辺に御食したまひし時、4月の上旬に当たりき。ここにその河中の磯に坐して、御裳の糸を抜き取り、飯粒を餌にしてその河の年魚を釣りたまひき。その河の名を小河と謂ふ。またその磯の名を勝門比売と謂ふ。

懐妊中の子が生れようとする時に、お腹を鎮めるため石を着物に巻き、(韓国から)筑紫の国に渡ったのちに、その御子は生れた。その生まれた地を、名つけて宇美と云う。着物に巻いた石は筑紫の伊斗村にある。筑紫の末羅県の玉島の里に来て、その川辺で食事をした時に、4月の上旬の頃、その川の磯に座って、着物の裾の糸を抜いて飯粒を餌に、鮎を釣った。その川の名を小河と云い、その磯を勝門比売と云う。

神功皇后の行動

香椎宮(かしいぐう): 当初、九州に来て、仲哀天皇が、神功皇后と、拠点とした所。

香椎湾に近く、海上交通の便が良好。

仲哀天皇が、死亡。

神功皇后は、仲哀天皇の死後、吉備の臣の祖の鴨別を派遣して、熊襲討伐に成功。

松峡宮(まつおのみや): 神功皇后が羽白熊鷲を討伐する。討伐した土地の名を安心の意味で「安」と名付けた。(安→夜須)

拠点を、松峡宮(旧筑紫国・夜須郡・栗田村)にする。

山門県(やまと): 神功皇后は、山門県に行き、土蜘蛛・田油津媛(たぶらつひめ)を討伐。

火前(肥前)国の松浦県: 新羅征服の兵を募るため、神功皇后が親征。玉嶋里で、鮎釣りのパフォーマンスを行い、兵を募る。

大三輪社: 新羅征服の船舶と兵員が十分集まらず、大三輪社に刀矛を奉納し、募集のパフォーマンス実行。

新羅に出兵



香椎湾: 神功皇后は、新羅から香椎湾に戻る

宇美: 神功皇后は、御子を産む

筑紫国・伊斗村: 出産を鎮めるために腹に巻いていた石の残る処。

宇美から伊斗村(伊都の国)と想定する(上記の)処へは、山間の平坦な道が開かれている。

末羅国・玉嶋里: 産後のひだちも良く、のどかな鮎釣りでホットひと息。

出産後間もない時期のため、出産した宇美や松峡宮から近い処に玉嶋里があったと考えられる。

松浦県と末羅県は違う

- 神功皇后が玉島の里で鮎を釣る話は、記紀の両方に載っているが、その場面と意味する所は全く違う。
 - 日本書紀：
 - ✓ 九州内遠征中で、明確に**火前國(肥前国)・松浦県**の玉嶋里と明示。
 - ✓ 新羅侵攻の軍兵の募集が趣旨。
 - ✓ その場所を現代に示すものとして、玉嶋神社があり、その参拝の栞中の「祭神と由緒」にもエピソードの記載あり。
 - 古事記：
 - ✓ 新羅侵攻後、九州へ帰還し、御子を出産。産後の肥立ちが良く、ほっとした、のどかなエピソード。
 - ✓ 香椎に上陸し、出産のため(松峡宮に戻る途中) 南下した周囲を低い山で囲まれた静かな土地「宇美」で出産。南方向から南西へ平坦な道を抜けると「大宰府」方面に出る。
 - ✓ 臨月の腹を鎮めた「石」があると記述されるのは、筑紫の国の伊斗村。これは太宰府付近か？
 - **伊斗村は、宇美から松峡宮に至るルート上にあると見るのが自然。**
 - 尚、日本書紀に、石は伊観(いと)県にあるとの記述があり、古事記の伊斗(いと)村に対応する。
 - ✓ 出産後は、本拠地の松峡宮に移り、育てたものと推定。
 - ✓ 産後の肥立ちも良く、松峡宮から、遠くない場所にピクニックへ行き、食事を取り河遊びをしたもの。
 - ✓ その場所は、**筑紫・末羅県**・玉嶋里と明示。
- **結論：**

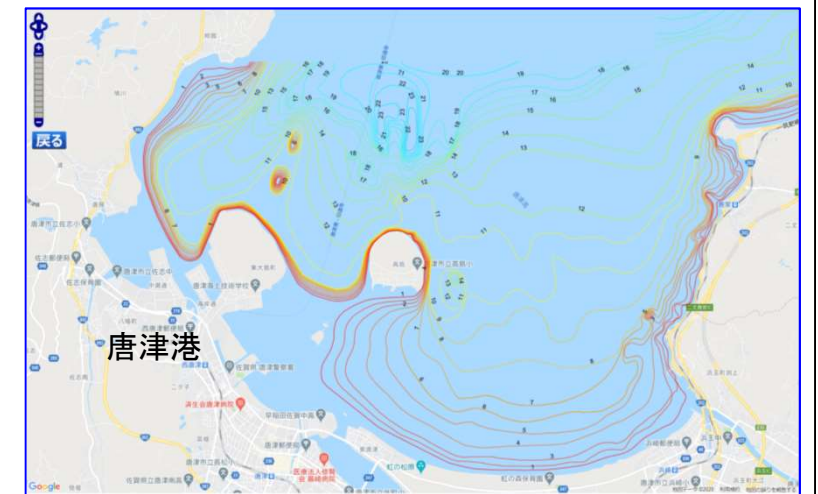
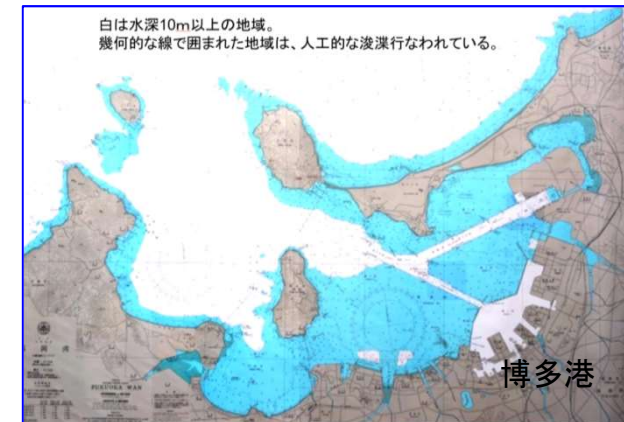
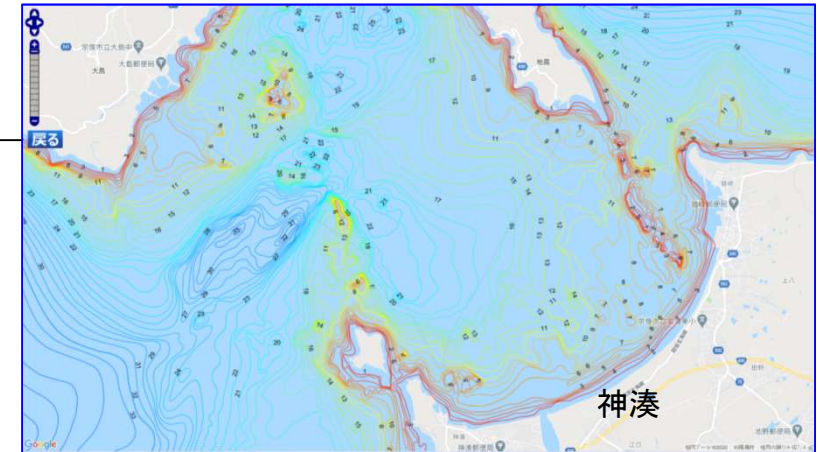
記紀の記述の違いを地図情報を加味して、歴史として読み直すと、同じ地名の玉嶋里で鮎を釣る話ではあるが双方のストーリー、バックグラウンドには明らかな違いがあり、別個の話。

肥前の松浦県 と 筑紫の末羅県は、明瞭に違う。

 - ✓ 従来の多くの説が、唐津を末盧の国としたことは、実は、根拠のないことだった。
 - ✓ むしろ、古事記の「筑紫・末羅県」には、伊都国に類似する「伊斗村」の記述があり、地名説では、こちらが根拠になりそう。
 - ◆ コメント：岩波文庫倉野憲司項校注の「古事記」には、松羅国の注には、佐賀県東松浦郡の玉島川とあるが、これは文学者が行う典型的な注釈で、事実関係を明らかにした上での注釈ではなく、物語の類似や地名類似だけで誤って、判断したもの。

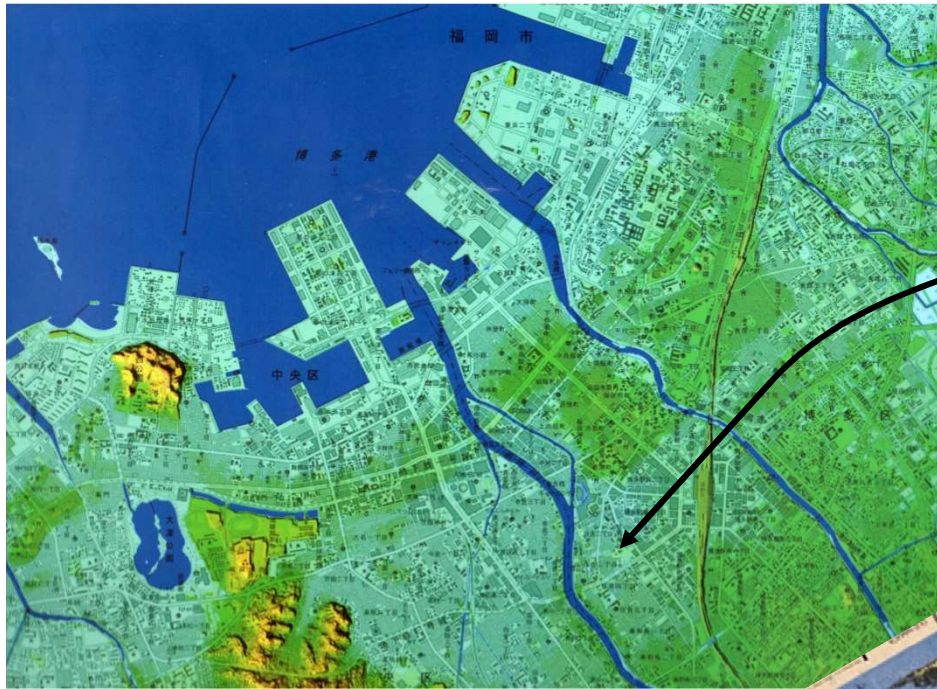
魏の使節の上陸地

- 上陸地のもう一つの大きな条件は、
大型帆船が入港できること。
 - 水深が十分あること。
 - 当時の大型帆船に必要な水深は、5-10mか？
 - 沙船タイプの船ならば、浅瀬航行が可能で、5mも可？
 - 砂地の浜ならば、乗揚げても可だが、汐が満ちるまでは、動けない。
 - 自由に動けるには10mの水深が欲しい。
- 十分な水深を持っているか？
 - 唐津湾は、現在も十分な水深がある。
 - 名護屋・呼子は水深十分
 - 博多湾は、十分な水深をもっているか？
 - 現在の水深は不十分(人工的な浚渫が必須)
 - 古代の水深は、大型帆船の入港が可能か？
 - 宗像・神湊は、現在も、十分な水深がある。
 - 浜から500mの距離で水深10m
- 博多湾 古代の水深は？
 - 古代の地図・文献・地形から推測する。

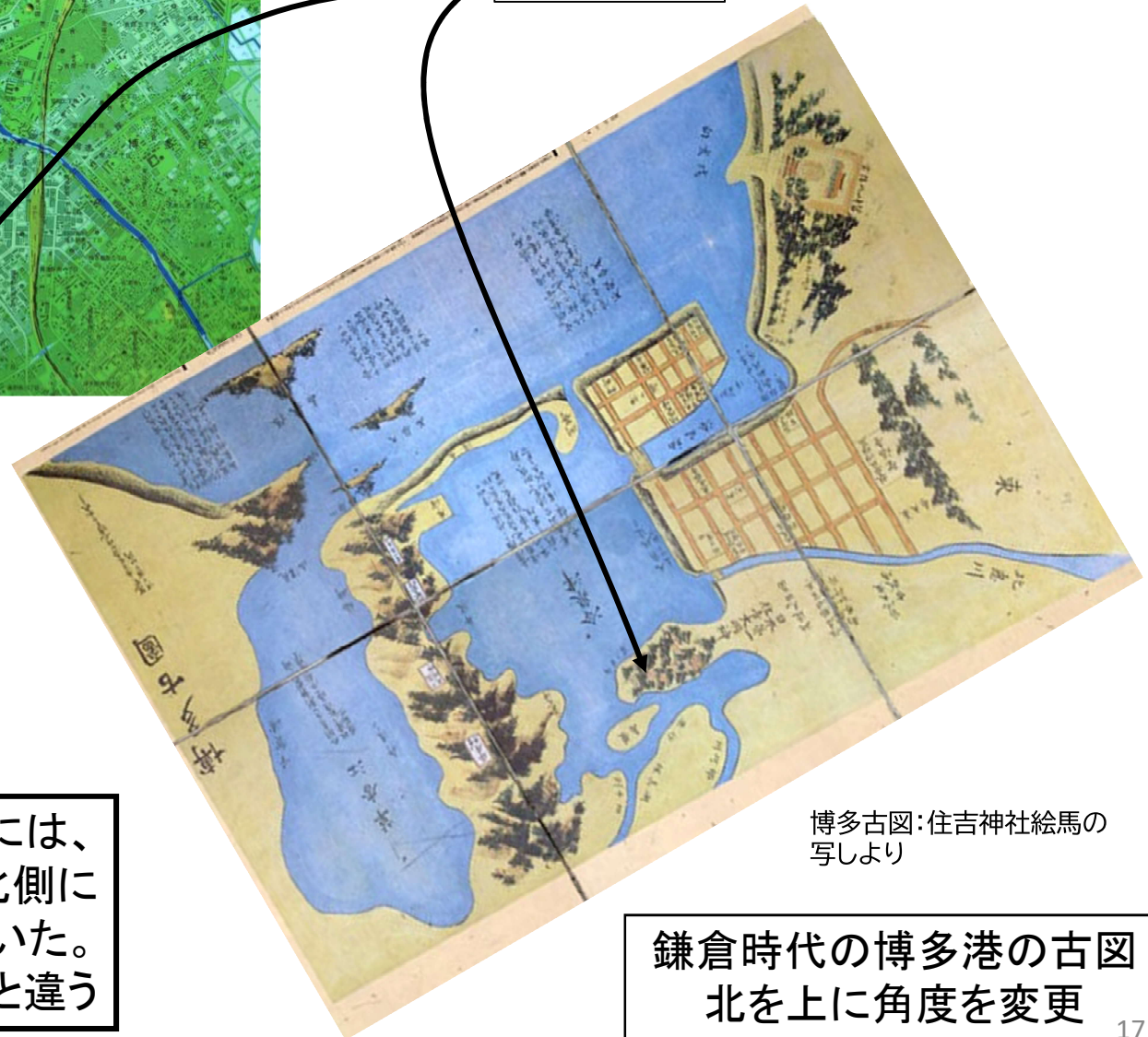


弥生時代の博多湾の推定

住吉神社



下山正一(九州大学)の
資料より
博多港付近の高低差を
示した地図



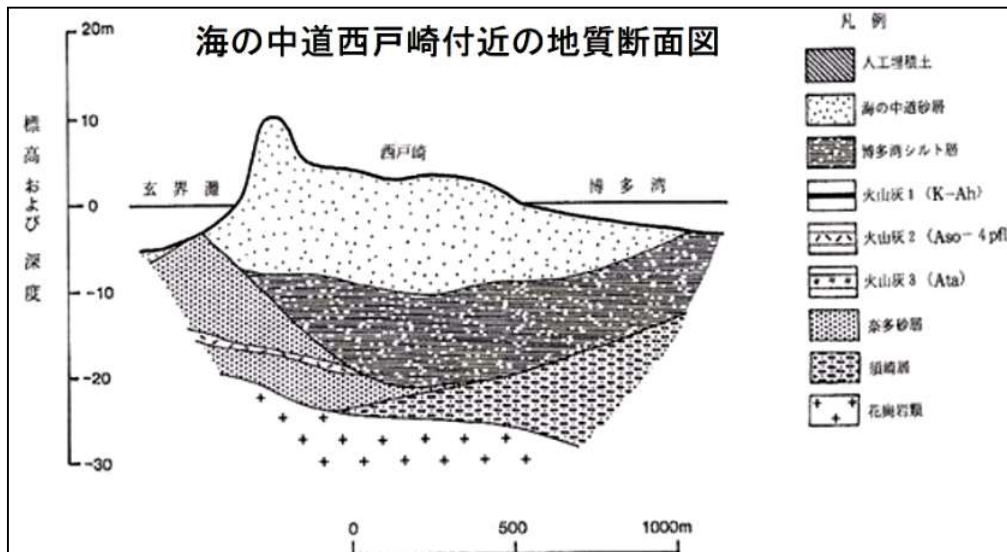
博多古図:住吉神社絵馬の
写しより

鎌倉時代には、
三笠川は、住吉神社の北側に
河口が来ていた。
流れが現在と違う

鎌倉時代の博多港の古図
北を上に変更

博多古図から、魏の使者の来た時代を推察する

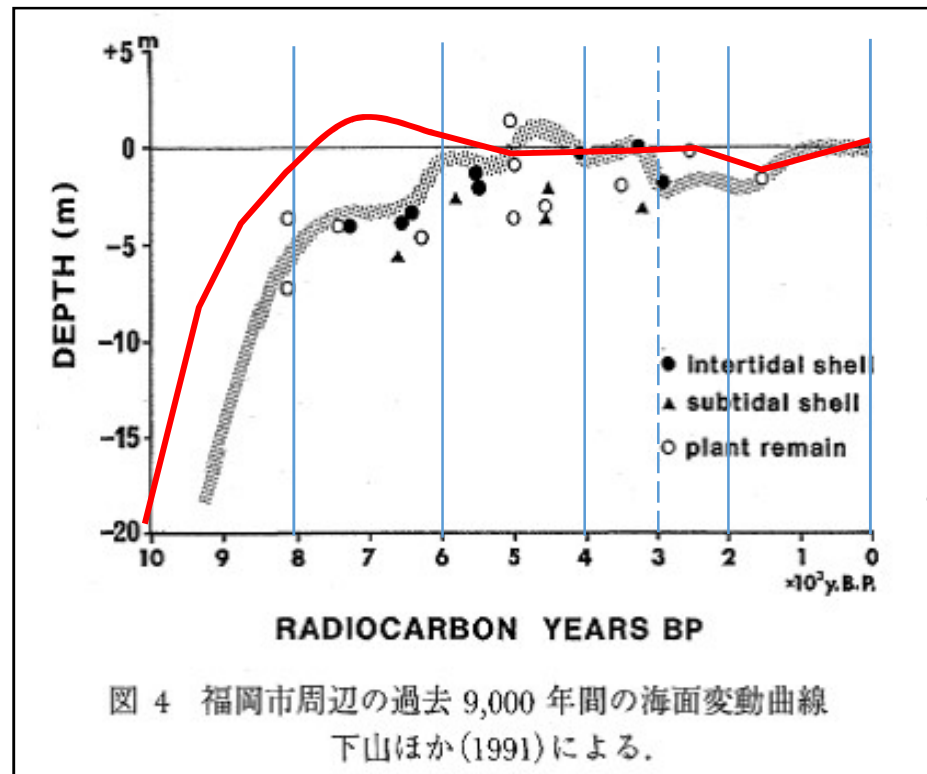
- 現在の博多港付近と鎌倉時代の古図の間には、かなり大きな変化が見られ、簡単には類推できそうも無い。
- 博多湾とこの付近一帯の地殻変動を調査している地質学者の資料をベースに博多港の付近が、現在の遠浅の海と「ハカタ」「ハ潟」の海岸線とは、違うものが見えてくるか検討する。
- 玄界灘沿岸では、唐津湾でも、糸島半島付近でも、砂・砂丘が見られ、古代の地形を考える上で、大変大きな影響を持つことが予測される。
- 博多湾の北側には、志賀島とつながる海ノ中道という巨大な砂洲が形成されている。
 - この砂洲は、縄文時代には、既に形成され、巨大な砂の塊が存在した。
 - 縄文海進で海面が上昇したときに、大きな影響を受け、堆積した大量の砂が、博多湾に移動した。



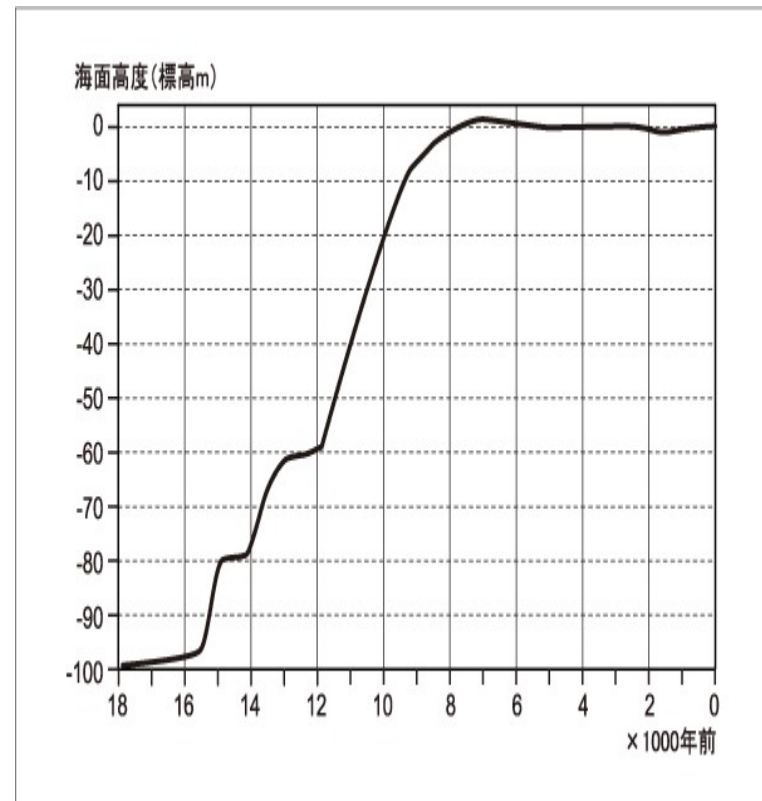
博多湾付近の地殻変動

- 博多湾付近の地質学の論文を見ると、不思議なデータに遭遇する。
 - (財)九州大学出版社1998年発行の「福岡平野の古環境と遺跡立地 ―環境としての遺跡との共存のために―」等
- 縄文海進のピークは一般的には、6500年前付近と云われるが、博多湾では、凡そ3100年前が海進のピークだったとのこと。(赤のラインは、出雲のデータを写す。)
- 海面レベルは、博多湾も、出雲も、太平洋側も同じはず。奇妙なデータ。
 - この奇妙さが解決のヒントになった。
 - 博多湾付近は、地殻の変動が発生して、上下動していた。

地質調査所 地域地質報告「福岡地域の地質」より



第1図 中海・央道湖地域の後氷期の海水準変動
大田WEBミュージアム書庫 より



地質模式図

- 博多港と博多駅を通る断面の地質図がある。
 - 注目するのは、「箱崎砂層」と上部を覆う「海の中道砂層」
 - 箱崎砂層は、縄文海進期以降の河川堆積物及び粗い砂
 - 海の中道砂層は、細かい砂の層
 - もうひとつの注目点は、汀線と遺跡の分布限界
 - 3000年前がピークで位置が内陸側
 - 汀線がそれ以降、時代と共に、徐々に海側へ
 - 縄文海進時の痕跡が別途残る



大博通りは、JR博多駅から博多港まで直線に伸びており、この断面図

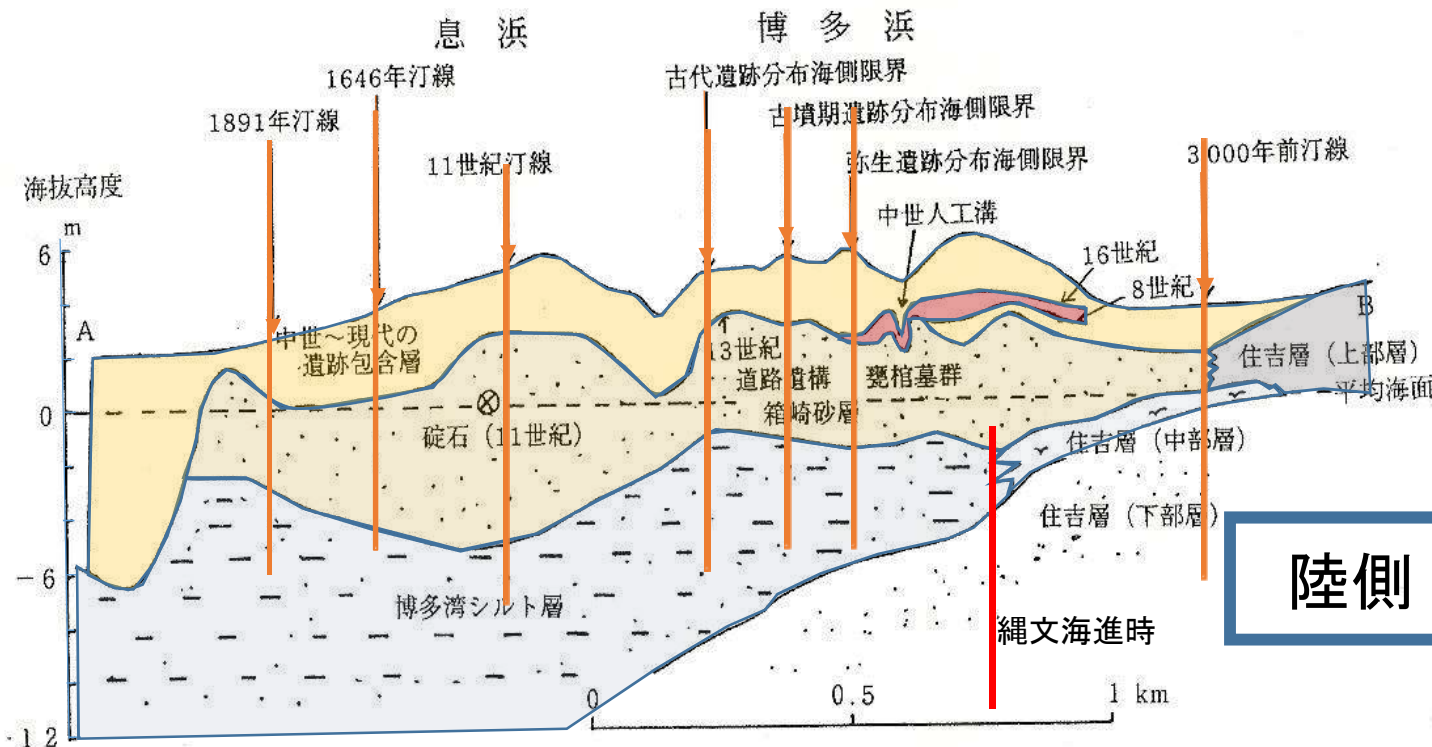
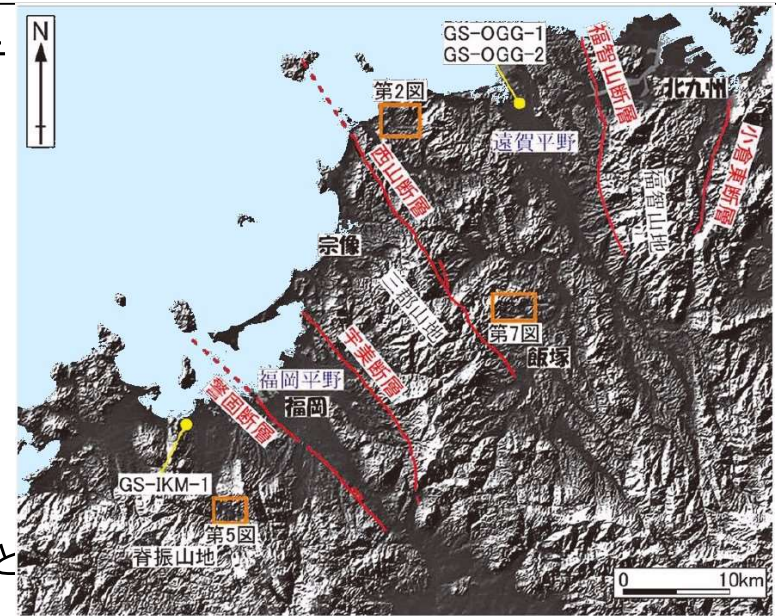


図 4-15 大博通り付近の地形・地質・遺構等の模式断面図

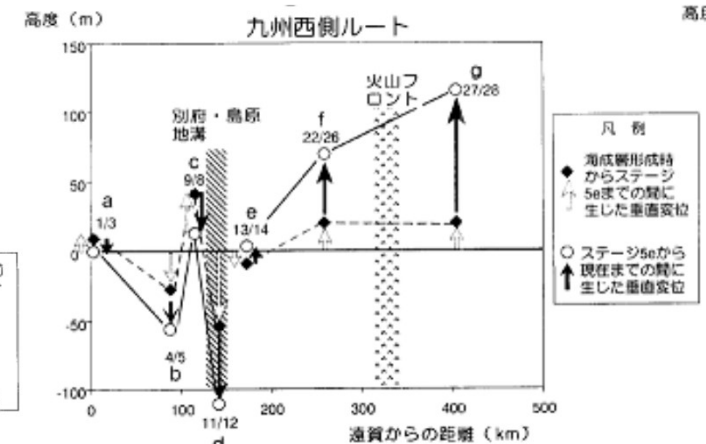
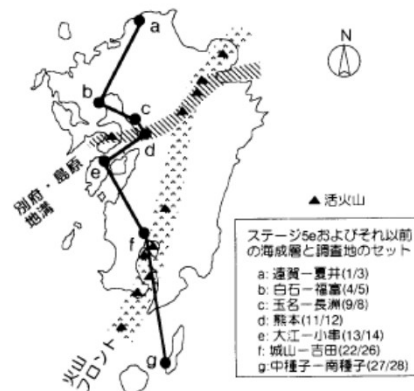
博多付近の地殻とその変動の傾向

- 平成22年度沿岸域の地質・活断層調査研究報告「福岡県日本海沿岸における低活動度の活断層と平地地下の第4世紀堆積物に関する地質調査」より右図のように、博多平野は、警固(けご)断層と宇美断層に挟まれた地域。
- 警固断層では、2005年の福岡県西方沖の地震(マグニチュード7.0)でその断層の存在が認められた。
 - 警固断層帯南東部の最新活動時期は、約4,300年前以後、約3,400年前以前であった可能性があります。また、平均活動間隔は、約3,100–5,500年の可能性があります。このこと将来の地震発生の可能性が危惧されている。



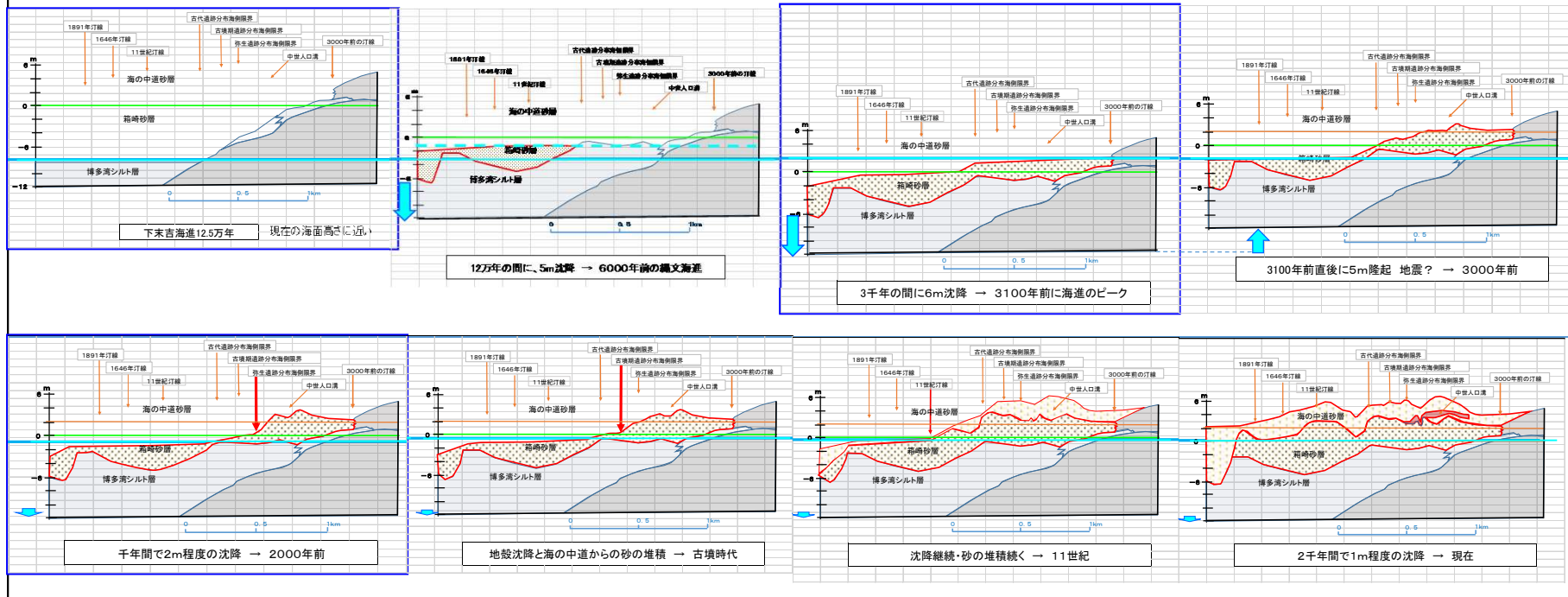
第1図 研究地域の地形図と活断層の分布およびボーリング地点。

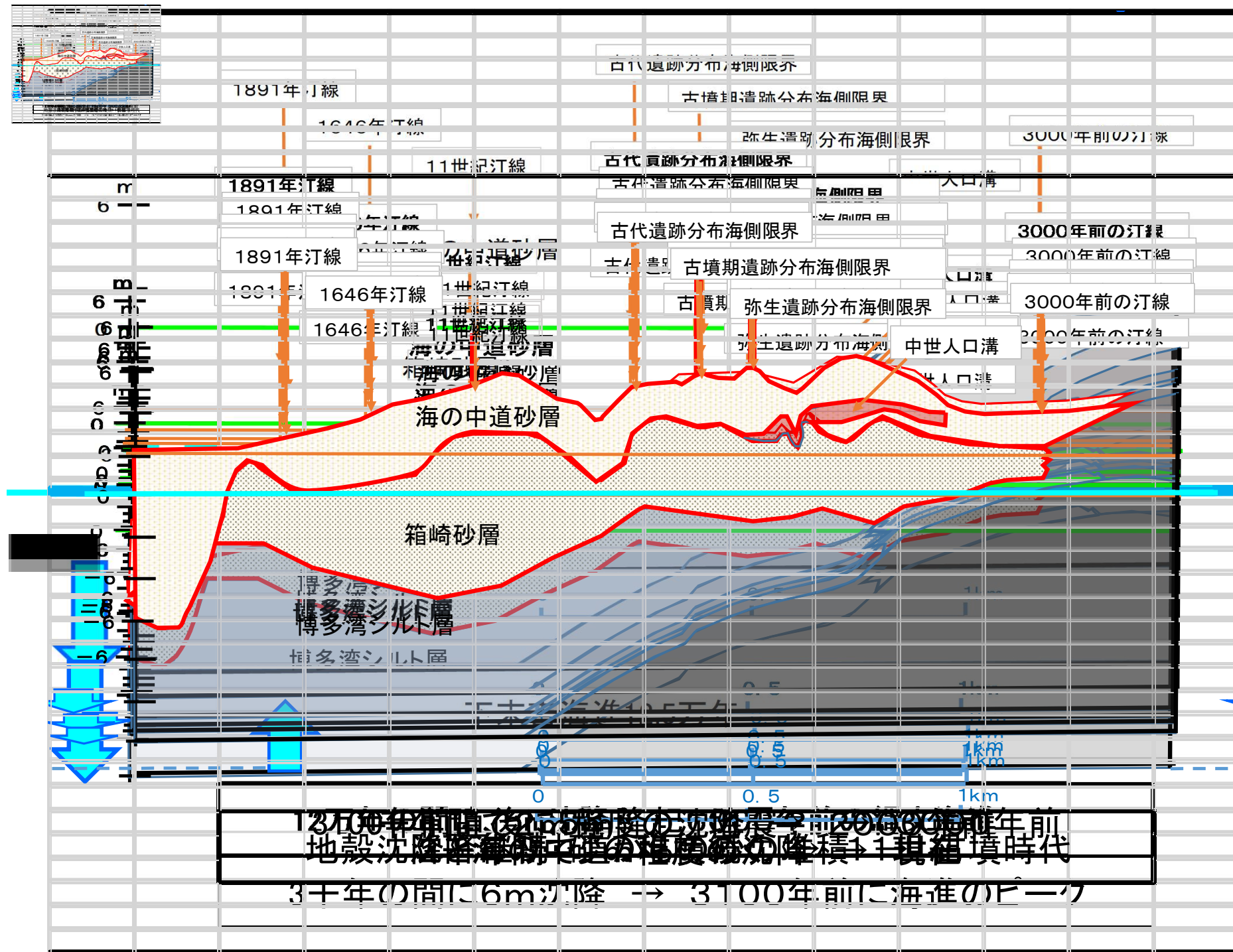
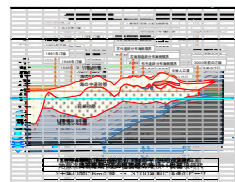
- 地質学雑誌 1999年5月号「旧汀線高度からみた九州の後期更新世地殻変動様式」による
 - 従来、九州全体が隆起地域とみられてきたが、北九州と別府・島原ラインでは沈降地域であることが判った。



地殻と地形の変動のシミュレーション

- 縄文海進以前の大きな海進は12.5万年前の下末吉海進と云われる。
 - この痕跡が海面下7.5mの処ににあると云う。
- 「旧汀線高度からみた九州の後期新世地殻変動様式」 下山正一外:九大・京大・熊大 地学雑誌105巻5号1999年5月 12.5万年前の下末吉海進の時の海面を示す汀線が、遠賀-7.9m、福岡-7.5mの位置にある。この海進時の海面高さは、現在の海面高さと同じと見積もられている
- その面=現在の海面高さを基準にして、縄文海進時、3100年前のピーク時などの海面高さと地殻との関係に基づき、地殻上下変動を行い、砂の移動を加味し、シミュレーションしてみたのが下の図。





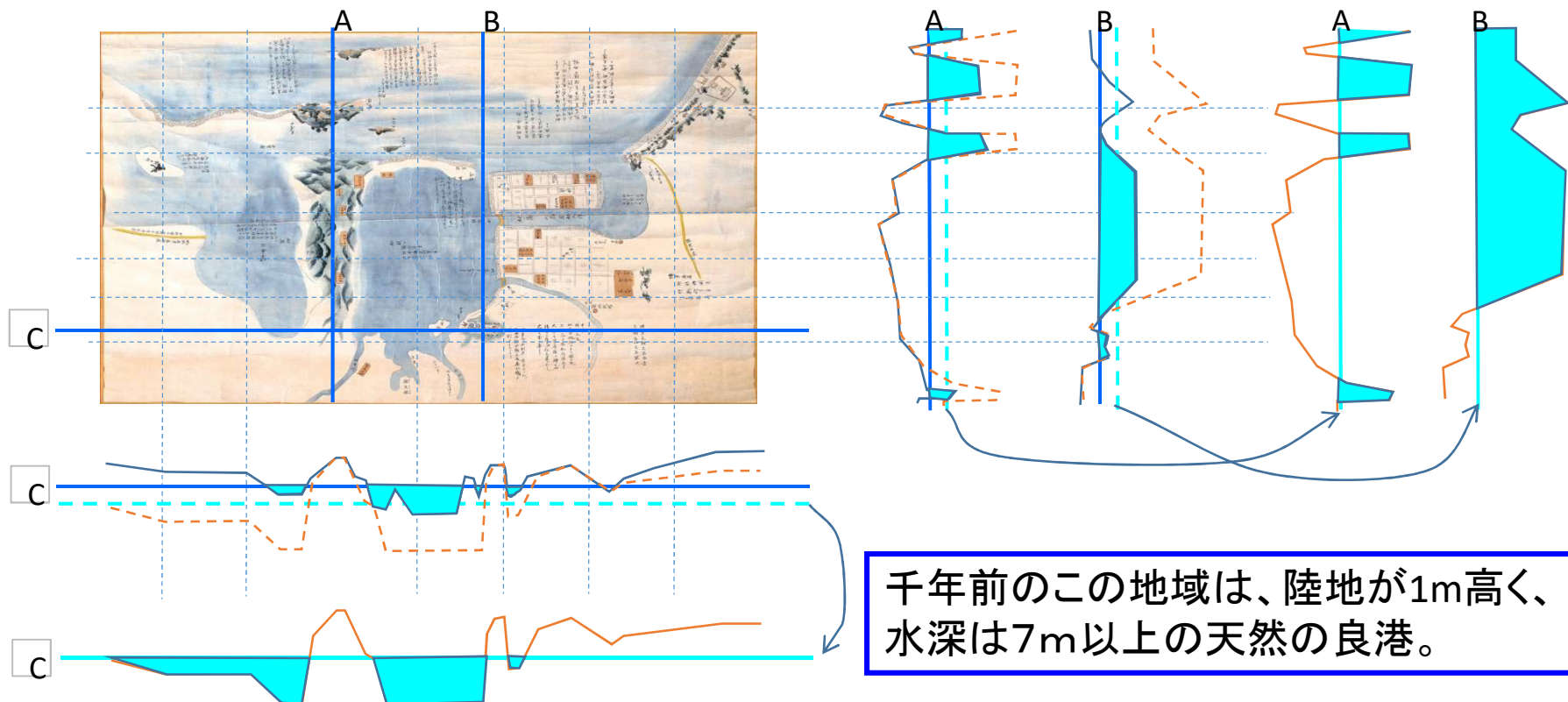
地殻と地形の変化結果

- 縄文海進より3100年前の方が海進としては高いことは、この付近の地殻が3100年前に大きな地盤沈下が発生したことを意味する。福岡平野が、警固断層と宇美断層に挟まれた地域であることから、地震を伴う地殻変動で急激に沈下したことを示す。
- 12.5万年前から順を追うと
 - 緩やかに地盤沈下を続け、6500年前の縄文海進では、海岸線が侵食され、海の中道の砂洲が半崩壊し、大量の砂が博多湾内に流れ込んだ。
 - 3100年前以前に、地震を伴う地殻変動で、6mほど沈下。縄文海進より高い位置まで海岸線が侵食された。その付近まで、河川の堆積物と海ノ中道から流失した砂が海岸線まで堆積した。
 - 沈下した地殻が逆に、5mほど隆起し、堆積した砂地が陸地となった。海岸線は海の波浪による侵食で後退する反面、海ノ中道起源の砂が吹き寄せられ、砂の堆積が行われた。
 - 2500年前には、砂の堆積した地盤が耕作可能な低地となり、初期や弥生人の到来時には、水田となり、遺跡が分布した。
 - その後、砂の堆積が多く、陸地は拡大し、居住地域が元の海側に拡大していった。
 - 縄文遺跡、弥生遺跡、古墳時代と重なりながら、海側へ移動・拡大していった。
 - 海は、時間の経過と共に、砂が堆積し、遠浅の海になった。
 - 海岸付近は、砂の堆積と地盤沈下のバランスで、固まらず、砂に足がめり込む、「ハガタ」となった。

2000年前の博多湾は、現在の足が砂の中にズブズブはいる「ハガタ」ではなかった！

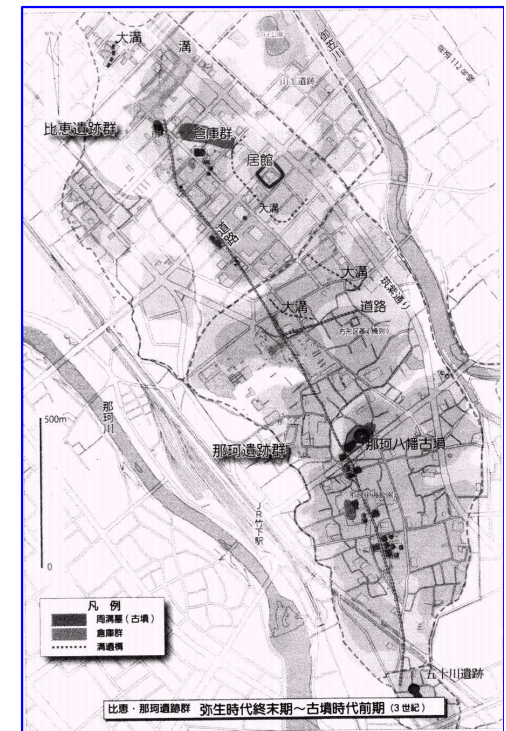
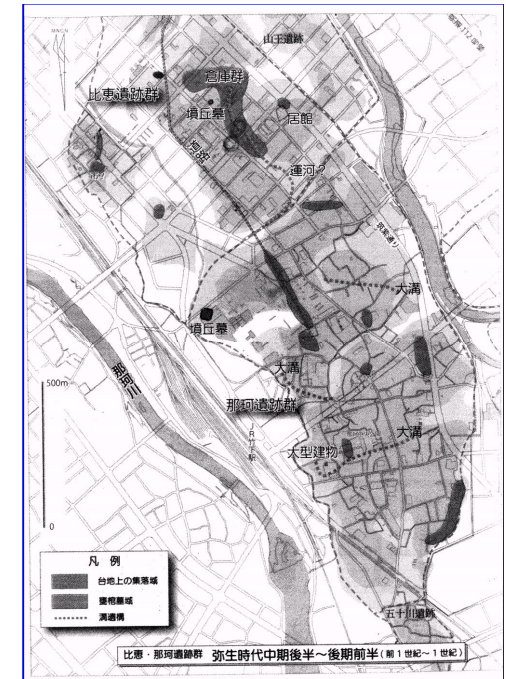
住吉神社近くの旧博多港 ②

- 博多往古図(「大田資料」J552号 福岡県立図書館のデジタルライブラリー)に描かれた旧博多港の図を元に、千年ほど前の地形の復元を試みる。
 - 鎌倉時代の港湾としては、大型船の入港を考え、水深は5m以上あったものとする。
 - 地殻自体は、千年前は1mほど、高かった。 砂の堆積は、千年で3mほどとする。
- 千年前は、陸地は1m高く、水深は、 $5\text{m} + 3\text{m} - 1\text{m} = 7\text{m}$

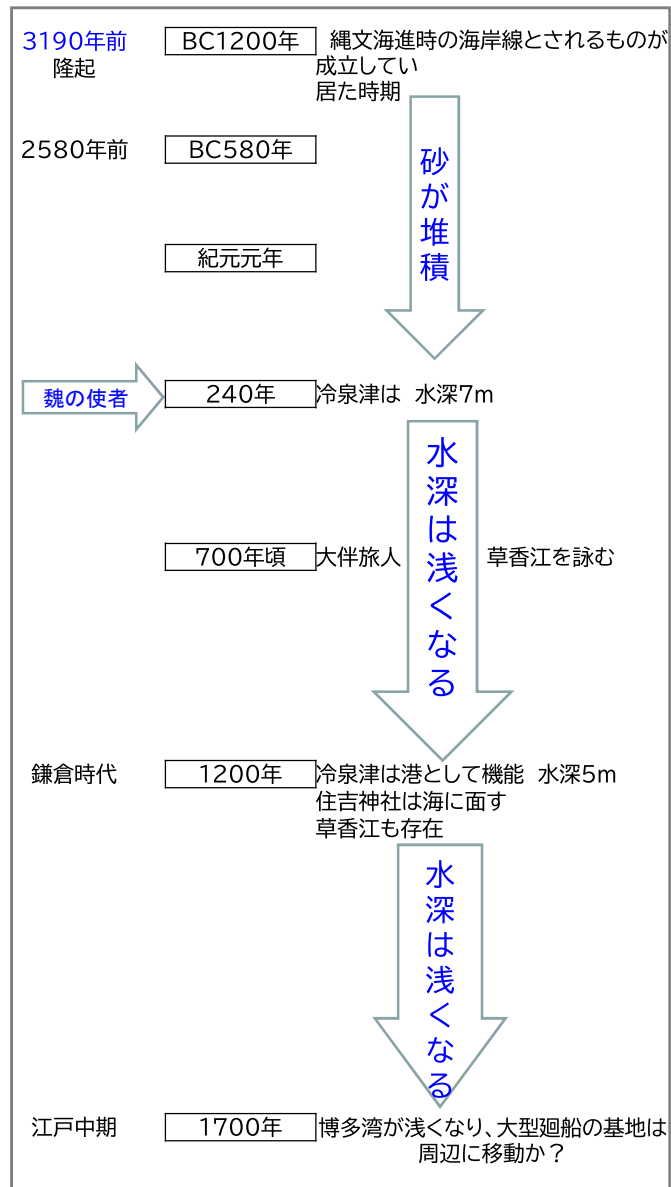


遺跡・文献に残る博多港

- 博多港付近の比叡・那珂遺跡群は、
- この遺跡に人々が定着したのは、米作りが始まった弥生時代前期で、以後集落や甕棺墓地、墳丘墓が営まれ、後期には環溝集落も出現した。墳丘墓の甕棺墓には銅剣が副葬されており、また青銅製品(銅剣・銅矛)やガラス製品の生産を物語る鋳型や取瓶などが出土した。弥生時代の集落構造や生産のありかたを知る上で重要な遺跡である。また、甕棺出土の銅剣に付着した絹は、日本最古の絹織物とされている。
- 昭和27年調査された一辺約10mの環溝集落(第5号)が、「比恵環溝住居遺跡」として県指定史跡となり、保存されている。古墳時代後期(6～7世紀)になると、大型の高床式倉庫群が造営され、建物の配置や規模から、『日本書紀』記載の那津官家に関する建物として、平成13年国史跡に指定された。
- 古墳時代後期(6～7世紀)に那津官家(非常時に食料を保管した)が作られたことは、この時代まで、港としての機能があった事を示す。
- ◆ 貝原益軒の筑紫国続風土記 卷之四 より
 - 弘仁5年(814年)新羅の人が筑紫国博多津に漂着との記事が、日本後紀にあり。これが「博多」と云う地名の初見。
 - 833年～850年 新羅の人が筑前大津に来るとの記述、続日本紀にあり。「大津」も、博多を指す。
 - 貞観11年(869年)新羅の海賊2艘が博多到来、又、筑前那珂乃荒津に到来とも記述。那珂の荒津とも呼称された。この件、博多は町を指し、荒津は港を指す。
 - その他の事例を引き、石城は博多で、港は冷泉津と称する。「はかた」を中国(唐)の書では、覇家臺、花旭塔、八角島とも記す。
 - 長治2年(1105年)筑前国那珂郡博多津とあり、又、商船の到来する所を挙げ、薩摩の坊津、筑前の花旭塔、伊勢の洞津(あなつ)と挙げ、博多を中津と称すると記す。



博多湾 港の水深は歴史的に見ても十分あった



- 紀元前1000年頃には、博多付近の地域は隆起し、現在の博多駅付近に海岸線が来ていた。
- 航海の安全を祈る住吉神社も、駅に程近い所にある。
- 魏の使者の来た240年頃は、冷泉津・住吉神社付近は、十分水深があり、港としての機能を持つことが可能。
- 港湾地域を示す弥生の遺跡群も、近くに存在する。
- その後も、奈良時代・鎌倉時代まで、港であったことが推測される史料もあり、港湾の絵図も遺る
- 江戸時代中期以降は、大型船の基地が周辺に移り、水深の不足が発生していたかも知れない。
 - 江戸時代から明治初期にかけて全国的に物資を輸送した弁才船(大型の帆による帆走専用船)
 - 大型の千石船は、米俵の四斗俵2500俵(150トン)を積むことができました。
 - 当時、博多湾内には、能古(のこ)、今津、浜崎、宮浦、唐泊(からとまり)という筑前最大の五つの浦があり、千石船による内航海運の基地として栄えました。



3候補地の何処へ 上陸？



- ・ 古代の地形を考慮すると、上記三地点はいずれも、物理的には良好で、候補となる。
 - ✓ 梯儁の数千人規模の使節が訪問したとすると、どの港が適切であっただろうか？
 - ✓ 張政の救援軍事使節団の訪問にも適切な港であったか？

3候補地の何処へ 上陸？

		唐津		博多	宗像・神湊
壱岐の島からの千里の距離か？		▲		○	○
古代の港の水深は適切か？		○		○	○
東南500里に伊都国	伊都国	佐賀	糸島市	太宰府	直方
	陸行可能か？	○	×	○	○
	伊都から津：港の 管理が可能か	×	○	○	×
女王国から最も近い大きな港か？		×	×	○	×(宇佐説)

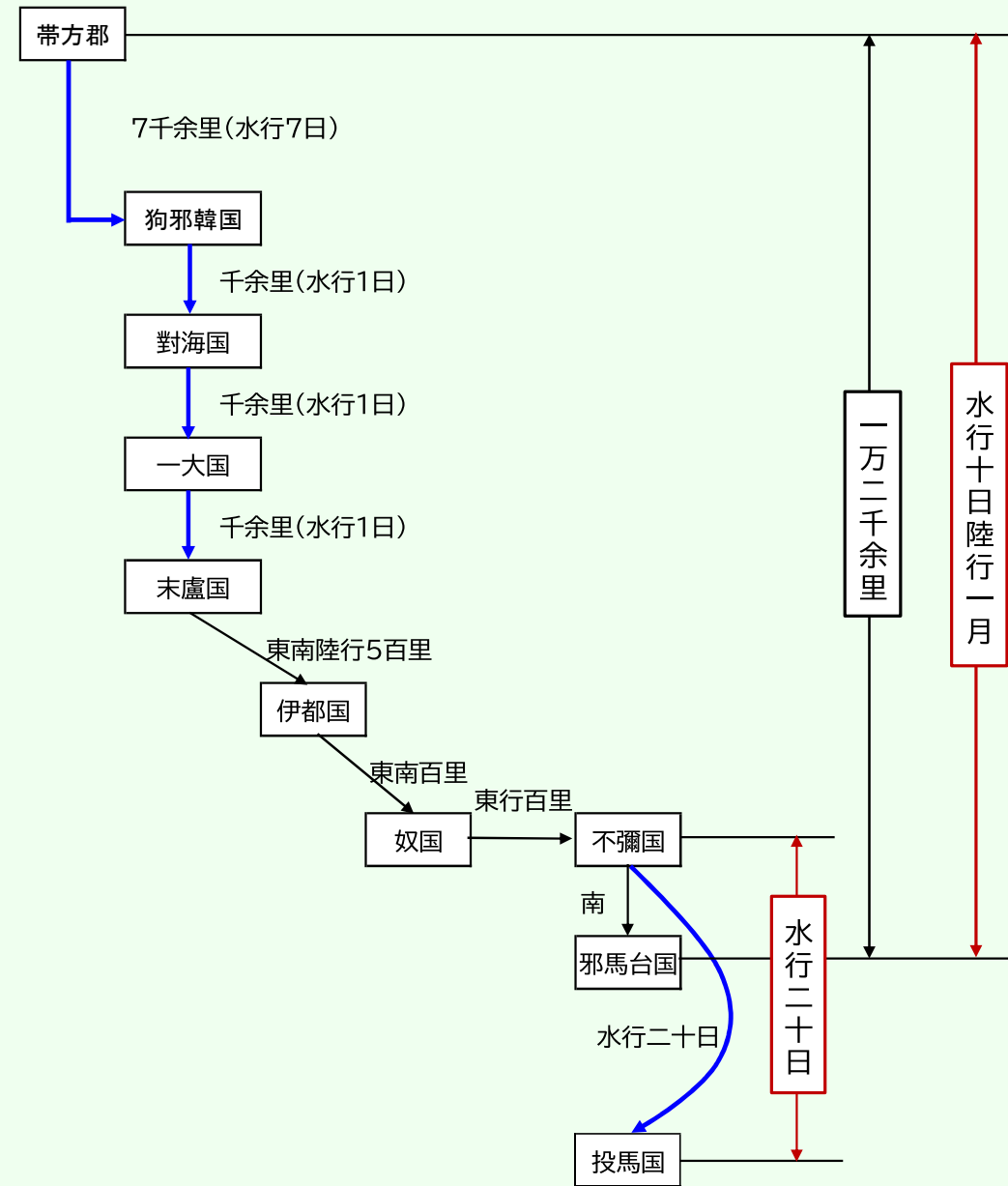
- 唐津と宗像・神湊の両港は、不適切であることが、一目瞭然。
- 博多港とすると、
 - － 伊都国は、現在の太宰府付近
 - － 邪馬台国は、筑後平野
 - この場合、全ての条件が揃う。
 - － 問題として残るのは、
 - » 陸行500里の距離が、短いこと
 - » 奴国・不弥国の位置の比定は何処になるか？
- 改めて、旅程の解釈を再検討する
 - － 連続式と放射式
 - － 里数と日数の解釈

魏志倭人伝の旅程の解釈

- 旅程の解釈は、多種多様！
- ここでは、右図のような解釈とる。
- 旅程の表し方は、
 - 起点-終点 ----- 帯方郡-女王国
 - 距離 ----- 12000里
 - 所要日数 ----- 1か月と10日
 - 経由地・区間距離・方向
- 記載地名
 - ✓ 魏として関心のあった地名
 - ✓ 淮南子・山海経に有った地名
 - ・ 侏儒國・裸國・黒齒國
 - ✓ 外交上関心の高い地名
 - ・ 投馬国(会稽に交易に来る国)
 - ✓ 実存する地名(地域)
 - ✓ 経由地 (右図参照)
 - ✓ リストされた21か国
 - ✓ 狗奴国
 - ✓ 投馬国(前出)
 - ✓ 国有皆倭種

江戸時代の東海道の紹介記事

- ・ 江戸から京都
- ・ 距離120里(488Km)
- ・ 宿場数53
- ・ 成人男子の標準的旅行日数14日



魏志倭人伝

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對馬國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絕島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鰓水無深淺皆沈沒取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨舩柄渠舩有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來常所駐東南至奴國百里官曰兕馬舩副曰卑奴母離有二萬餘戶東行至不彌國百里官曰多模副曰卑奴母離有千餘家南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戶南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳靱可七萬餘戶自女王國以北其戶數道里可得略載其餘旁國遠絕不可得詳次有斯馬國次有已百支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有好古都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國次有蘇奴國次有呼邑國次有華奴蘇奴國次有鬼國次有爲吾國次有鬼奴國次有邪馬國次有躬臣國次有巴利國次有支惟國次有鳥奴國次有奴國此女王境界所盡其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王自郡至女王國萬二千餘里男子無大小皆黥面文身自古以來其使詣中國皆自稱大夫夏后少康之子封於會稽斷髮文身以避蛟龍之害今倭水人好沈沒捕魚蛤文身亦以厭大魚水禽後稍以爲飾諸國文身各異或左或右或大或小尊卑有差計其道里當在會稽東治之東其風俗不淫男子皆露紒以木縣招頭其衣橫幅但結束相連略無縫婦人被髮屈紒作衣如單被穿其中央貫頭衣之種禾稻紒麻蠶桑績績出細紒繅絲其地無牛馬虎豹羊鵠兵用矛楯木弓木弓短下長上竹箭或鐵鐵或骨鐵所有無與擔耳朱崖同倭地溫暖冬夏食生菜皆徒跣有屋室父母兄弟臥息異處以朱丹塗其身體如中國用粉也食飲用籩豆手食其死有棺無槨封土作冢始死停喪十餘日當時不食肉喪主哭泣他人就歌舞飲酒已葬舉家詣水中澡浴以如練沐其行來渡海詣中國恒使一人不梳頭不去蠟蟲衣服垢污不食肉不近婦人如喪人名之爲持衰若行者吉善共顧其生口財物若有疾病遭暴害便欲殺之謂其持衰不謹出真珠青玉其山有丹其木有梓杼豫樟槎櫓投檣烏號楓香其竹篠簪桃支有薑橘椒藟荷不知以爲滋味有獼猴黑雉其俗舉事行來有所云爲輒灼骨而卜以占吉凶先告所卜其辭如令龜法視火坼占兆其會同坐起父子男女無別人性嗜酒見大人所敬但搏手

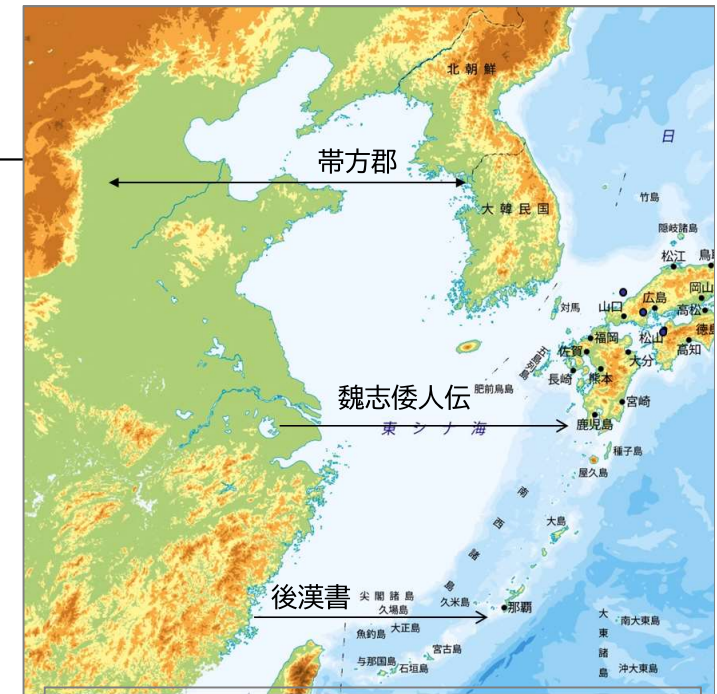
以當跪拜其人壽考或百年或八九十年其俗國大人皆四五婦下戶或二三婦婦人不淫不妬忌不盜竊少諍訟其犯法輕者沒其妻子重者滅其門戶及宗族尊卑各有差序足相臣服收租賦有邸閣國國有市交易有無使大倭監之自女王國以北特置一大率檢察諸國諸國畏憚之常治伊都國於國中有如刺史王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王不得差錯下戶與大人相逢道路逡巡入草傳辭說事或蹲或跪兩手據地爲之恭敬對應聲曰噫比如然諾其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歷年乃共立一女子爲王名曰卑彌呼事鬼道能惑衆年已長大無夫婿有男弟佐治國自爲王以來少有見者以婢千人自侍唯有男子一人給飲食傳辭出入居處宮室樓觀城柵嚴設常有人持兵守衛女王國東渡海千餘里復有國皆倭種又有侏儒國有其南人長三四尺去女王四千餘里又有裸國黑齒國復在其東南船行一年可至參問倭地絕在海中洲島之上或絕或連周旋可五千餘里景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男生口四人女生口六人班布二匹二丈以到汝所在踰遠乃遣使貢獻是汝之忠孝我甚哀汝今以汝爲親魏倭王假金印紫綬裝封付帶方太守假授汝其綬撫種人勉爲孝順汝來使難升米牛利涉遠道路勤勞今以難升米爲率善中郎將牛利爲率善校尉假銀印青綬引見勞賜遣還今以絳地交龍錦五匹絳地縹栗圖十張縹絳五十匹紺青五十匹蒼汝所獻貢直又特賜汝紺地句文錦三匹細班華圖五張白絹五十匹金八兩五尺刀二口銅鏡百枚真珠鉦丹各五十斤皆裝封付難升米牛利還到錄受悉可以示汝國中人使知國家哀汝故鄭重賜汝好物也正始元年太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國拜假倭王并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物倭王因使上表荅謝詔恩其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青縹絲衣帛布丹木短弓矢掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬其六年詔賜倭難升米黃幢付郡假授其八年太守王頌到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡說相攻擊狀遣塞曹掾史張政等因齎詔書黃幢拜假難升米爲檄告諭之卑彌呼以死大作冢徑百餘步徇葬者奴婢百餘人更立男王國中不服更相誅殺當時殺千餘人復立卑彌呼宗女壹與年十三爲王國中遂定政等以檄告諭壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還因詣臺獻上男女生口三十人貢白珠五千孔青大句珠二枚異文親錦二十四

魏志倭人伝の記述の元となった文献

- 出だしの文章は、**陳寿**が古文獻から作文したものか
 - 倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國
- 旅程・倭人・倭国について
 - 從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里（以降）
參問倭地絶在海中洲島之上或絶或連周旋可五千餘里（までの文書）
 - ✓ この長い旅程・国々の名称・風俗習慣・制度・歴史などは、**梯儁の使節団**の報告書を用いて記述したものと推測
 - ✓ この中の一部の記述は、別の使節団の報告書や陳寿が追加した文章が見られる。
 - ① 郡使往來常所駐 伊都国の記述中に、**張政の使節**の報告書の内容を追加
 - ② 南至投馬國水行二十日 別の箇所にあった記述をここに挿入
 - ③ 計其道里當在會稽東治之東 **陳寿の考え**か、梯儁の使節が戻った後に、魏が喧伝した文句を挿入
 - 景初二年六月倭女王遣大夫難升米等 ～
 - ✓ これ以降の文章は、魏の政府内に残された**外交文書**を用いて記述
 - ✓ 但し、**卑彌呼以死大作冢徑百餘步** 以降の文章は、**張政の使節**の報告書を用いて記述
- 梯儁の使節団の報告書を用いて記述したものの中に挿入された3か所の文章は、違和感があり、陳寿の意思・意図が感じられる。
 - ① 郡使往來常所駐 は、単純に、必要があつて記したもの。
 - ② 南至投馬國水行二十日 は、梯儁の使節団が出立する前から、魏の中で話題になっていたもので、この所在地は特に重要な報告事項だったと推定。
 - ③ 計其道里當在會稽東治之東 わざわざ推測として、この項目を追加したものとする。
- 敵対する呉の東側にある戦略的に価値のある地域に倭国がいることを、魏としては、喧伝していた又は、陳寿の記述意図があつたものと推測する。

投馬国考(魏志倭人伝と後漢書の差)

- 魏志倭人伝 : 計其道里當在「会稽東冶之東」
 - » 使節が訪問し天測し、推定した位置と見る
- 後漢書 : 其地大較在「会稽東冶之東」
 - » 著者范曄が三国志を読み、推定した位置と見る
- 三国志・呉志の記述を引用
 - ✓ 会稽海外有東鯤人(鯤音達奚反)分爲二十餘國又有夷洲及澶洲
傳言秦始皇遣方士徐福將童男女數千人入海求蓬萊神仙
不得徐福畏誅不敢還遂止此洲 世世相承有數萬家
人民時至會稽市會稽東冶
縣人有入海行遭風流移至澶洲者所在絕遠不可往來
 - ✓ 三国志・呉志には「**人民時有至會稽貨布**」とある。
- 范曄の理解(推測)
 - 范曄は呉志の記述から、会稽に貨布の為に定期的に訪れる人民を、邪馬台国の倭人と推定し、
 - 訪れる人民の居ると記された場所を考慮し「会稽東冶之東」と記したと推定する。
 - 范曄の推定とは、残念ながら異なり、貨布の為に訪れた人々と邪馬台国の倭人は違っている。
 - 貨布の為に訪れた人々は琉球人で、邪馬台国の倭人は九州人。
- 魏の使者
 - 三国志の呉志に記された内容が、同時代の魏の為政者の認識であるとする、「呉に通じている」ことは、外交上の重大事項。
 - 邪馬台国人が会稽へ訪れていないと判ると、その訪れる倭人の居る国の調査は、外交使命。
 - この訪れる国を問い質し、「投馬国」と回答を受けて、距離を質したが、水行20日と遠く離れた国であると判明し、重大事項として、魏の使者は報告書に記したものと推定する。
 - これが、「投馬国」と「水行二十日」の文字が、邪馬台国の直前に挿入された理由だとすると、納得がゆく。
 - 貨布の「貨」は売るの意か？「布」は絹布など、タカラガイ朝献外交時の琉球の側主な交易品



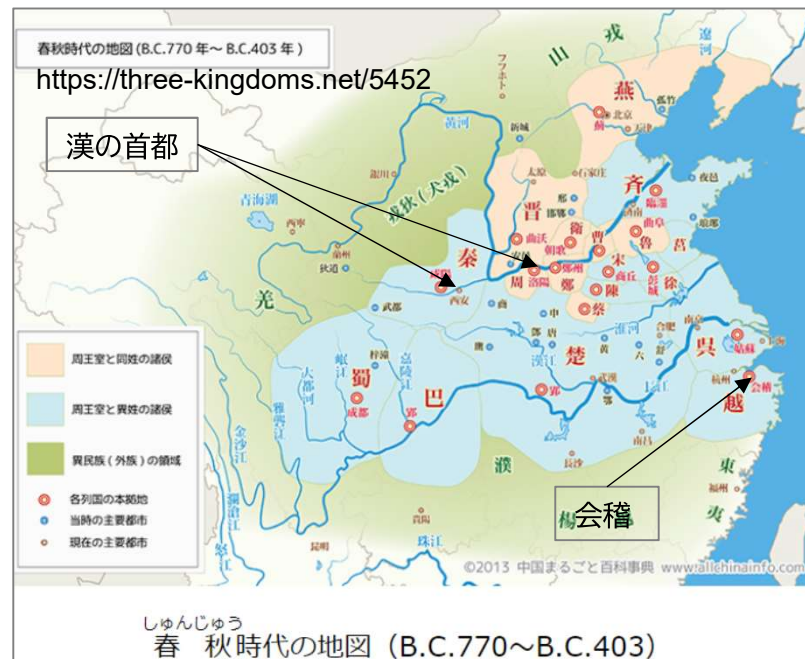
伊藤雅文氏のブログ「邪馬台国と日本書紀の境界」を参考にして。国土地理院地図を使い作成

投馬国考 2

－ 漢書地理志 會稽海外有東鯤人、分為二十餘國、以歲時來獻見云。

「會稽の大海の向こうに東鯤人が居る。二十餘の国に分かれていて、季節ごとにやって来て献上を行った」

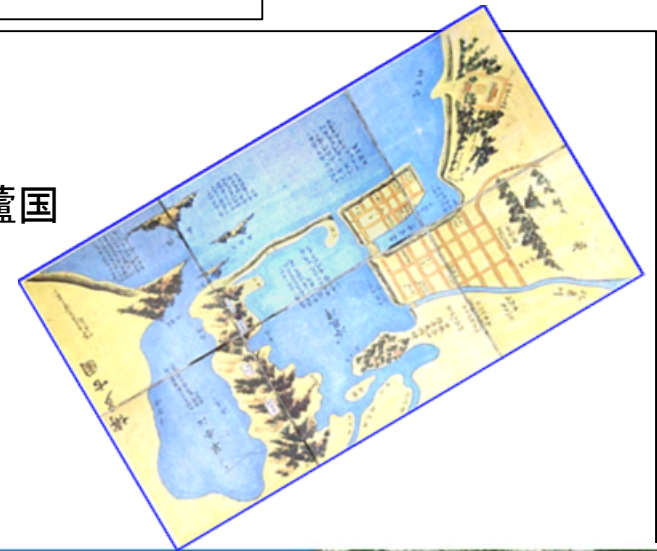
- ・ 三国志・呉志以前にも、紀元30年の後に成立した漢書地理志にも、東鯤人が会稽に到来したことが記されている。
- ・ 紀元57年に、光武帝が倭奴国王に「印綬」を与えたとの記述から、後漢の首都であった長安又は洛陽に倭人が朝献。
 - ✓ 紀元前後の時期に、倭人が、黄河領域と長江に近い会稽、この両方の地域と交流していたとは、考え難い。
 - － 遣唐使では、会稽に近い寧波に向けて航行したが、隋の時代に建造された大運河で洛陽方面に安全に行けたため、紀元57年頃は、両地区は遠く隔たった場所だった。
- ・ 後漢の光武帝に朝見した倭人は、九州に居た倭人で、会稽に商いに來たのは琉球の倭人であったと推定する。
 - － この二か所から来ていた倭人が、別地域の倭人とは、認識されていなかった。
- ・ 琉球・沖縄の宝貝交易の存在を、邪馬台国論者が認識していなかったため、更に、「投馬国」に所在が不明だったために、いらぬ論争に発展したものと思います。



『1万2千里：水行10日陸行1月』でたどり着く女王国は？

・ 対馬・壱岐以降を次のように想定する。

1. 九州上陸地点を、博多(博多津・那津・冷泉津)とする。→末蘆国
2. 伊都国は、大宰府付近
3. 奴国は、筑紫野市筑紫神社付近
4. 不彌國は、朝倉市筑前町(旧夜須町)役場付近
5. 女王国は、その南の城山(花立山)の北側付近



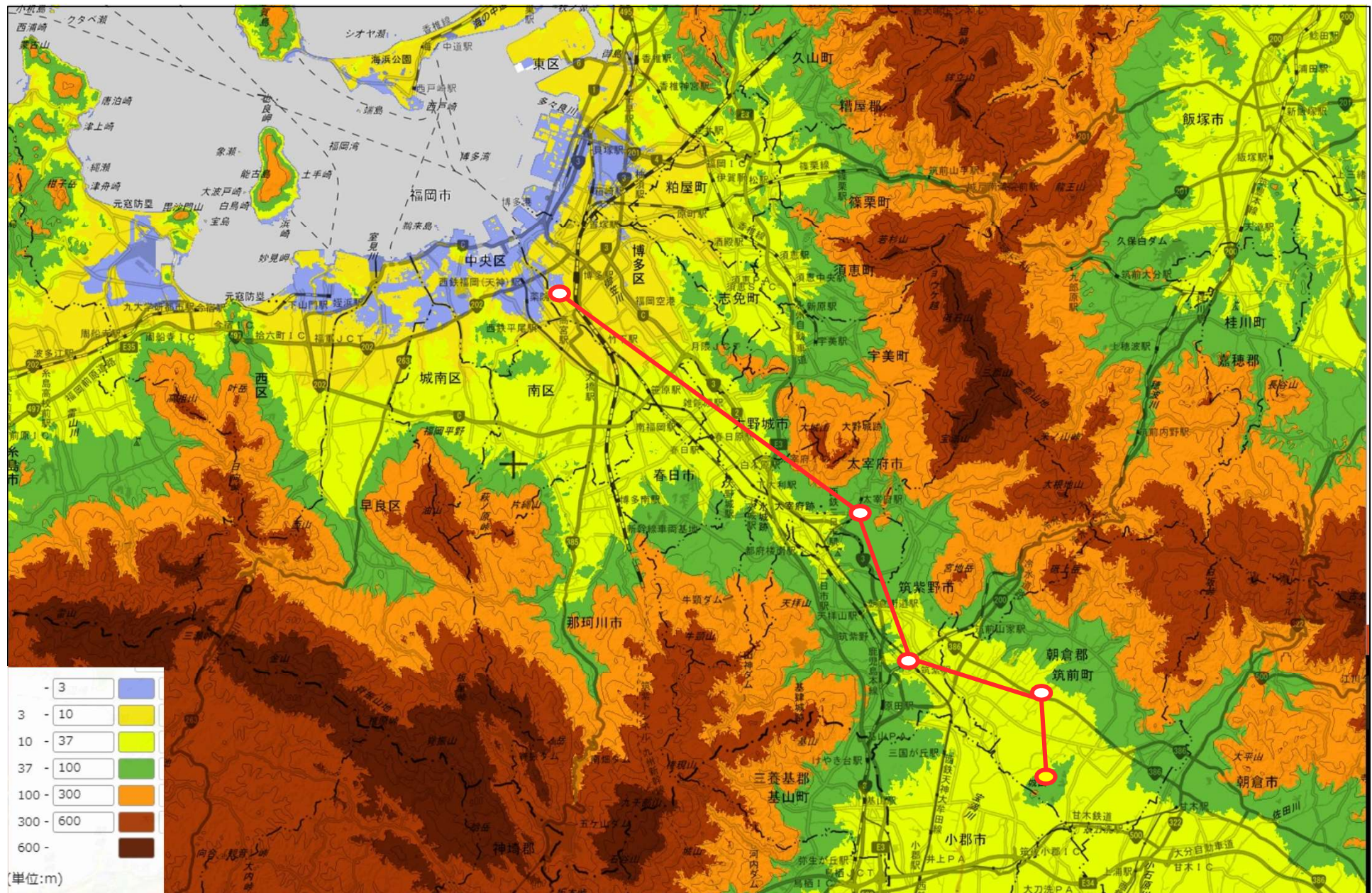
・ このルートは、

- ・ 倭人伝の記述に合致するのか？
- ・ 検討してみる。

・ 又、このルートと国々が、考古学の成果物と矛盾がないかも、検討してみる。



上陸地点から邪馬台国



方向・距離

- 古代の地点や道筋を概略算出してみたのが下記のもの。正確ではないが、おおよそ合致する。

- 上陸地点を、博多：住吉神社付近（標高3m）とする。次の目的地までの方向は、**東南**

- 大宰府付近までの**直線距離**は、**13km**
- 博多古図を見ると、三笠川の河口は住吉神社付近（現在と違う地形）
- 旧三笠川の流れに沿って、道が作られ、曲がりくねっていたものと想像。
 - 道の長さは、直線距離の2倍と見る：26km
 - 1里75mと換算し、26kmは**約350里** これを**5百里**と称した。

対馬と韓国の巨済島の間は約75km
 吉岐と対馬の間は73km、
 各々千里としている。
 そこで1里を75mと換算
 この換算は、**短里説と一致する**

- 伊都国：大宰府市役所（標高37m）から次の地点までの方向は、**東南**

- 筑紫神社付近までの**直線距離**は、**6.5km**
- 地溝地帯で、平坦な道のり 標高52mの所へ
- 道の長さは、直線距離の1.3倍と見る：8km
 - 8kmは**約113里** これを**百里**と称した

- 奴國は、筑紫神社付近（標高52m）から次の地点までの方向は、**東**

- 朝倉市筑前町役場付近までの直線距離は4.7km
- 途中で、宝満川を渡るため迂回する
 - 道の長さは、直線距離の1.3倍と見る：6km
 - 6kmは**約81里** これを**百里**と称した

	直線距離	係数	道の長さ	里数	里数概数	方向
住吉神社	13	2	26	347	500	東南
太宰府市役所	6.5	1.3	8	113	100	東南
筑紫神社	4.7	1.3	6	81	100	東
夜須町役場	2.5	1.2	3	40	0	南
城山北側						

- 不彌國は、朝倉市筑前町（旧夜須町）役場付近（標高31m）から、女王国までの方向は、**南**

- 直線距離は、2.5km から
- 平坦で障害となるもの無し。
 - 道の長さは、1.2倍と見る：3km
 - 3kmは**約40里**で、**百里とは云えず**、単に方向を記し、**距離は記さない**。

- 女王国は、その南の城山（花立山）の北側付近

魏志倭人伝で使われる数字

- 魏志倭人伝中に「自女王國以北其戸數道里可得略載」とあり、戸数と距離・方向は概略の記載が出来たと記している。

- では、どの程度に概略なのか？ これを推理する。

- 戸数の記述をまとめてみると右の表のようになる。
 - 奴国が2万、その他の国合わせて1万、合わせて3万
 - 極めて切りの良い数字になっている。

	戸数	合計
對海国	1,000	30,000
一大国	3,000	
末盧国	4,000	
伊都国	1,000	
奴国	20,000	
不彌国	1,000	50,000
投馬国		
邪馬台国		70,000
計		150,000

- 距離に関して

- 千、五百、百と云う数字で表されている。
 - 上記同様に、極めて切りの良い数字になっている。

- 方向に関して

- 南、東、東南、これらのみ。
 - 概略と云える。

- 数字は丸められた極めて単純化された記述方法を使用していることがわかる。上陸後の方位・距離も丸められたものと考え、前頁の計算でも、概略の基準に合致した数字と云える。

余里を+ α の表記

出発地		到着地	方位	距離など	
帶方郡	⇒	邪馬台国		12, 000里+ α	
帶方郡	⇒	邪馬台国		水行10日陸行1月	
帶方郡	⇒	狗邪韓国	東南	7, 000里+ α	水行
狗邪韓国	⇒	對海国	-	1, 000里+ α	水行
對海国	⇒	一大国	南	1, 000里+ α	水行
一大国	⇒	末盧国	-	1, 000里+ α	水行
末盧国	⇒	伊都国	東南	500里+ α	陸行
伊都国	⇒	奴国	東南	100里+ α	陸行
奴国	⇒	不彌国	東	100里+ α	陸行
不彌国	⇒	投馬国	南	水行20日	水行
不彌国	⇒	邪馬台国	南	-	-

魏の使者は博多湾に入り上陸

- 魏の正始元年の使節は
 - 大型帆船30隻以上の船団を組み、2～3千人の大集団で、倭国へ向かった。
 - 目的は、明帝の詔書・金印紫綬、継いだ斉王芳の詔書と授与の品物を、女王に届けること。
 - » 女王国との友好関係を築き上げること。
 - 成果としては、女王からの返礼の親書を得て、倭国の状況を記した報告書を作成し、無事帰国すること。
 - 訪問ルートは、倭の魏訪問使節から情報収集し、支援を得て、最適ルートを作成し、そのルートで訪問。
 - » 倭国の途中の国々は、女王国の協力要請を受け、魏の使節を歓待。友好関係を築く。
 - 往路は、壱岐島から博多湾に直行し、冷泉津・住吉神社付近に入港。
 - 帰路のルートも倭国の助言を得て安全な唐津ルートに戻る。
 - 無事に、女王国：邪馬台国に行き、詔書等を渡し、女王からの返書を得て、使命達成。
 - 予定通り、倭国との友好関係を樹立し、倭国の位置・情勢など必要な情報も入手して、無事に、魏の政府に報告で来たものと推定する。倭人伝の記述がそれを示す。
- **魏の使者は、壱岐から博多湾に直行し、入港・上陸した。**
 - **唐津には上陸しなかった。**
- その使節の成果を示すものとして、『女王国からの有り得ない軍事支援の要請』を受け、張政を派遣し、これも無事に軍事支援を全うで来たものと推定する。
 - この支援要請は、魏にとって「倭国を蹂躪し、属国として支配することのできる絶好の機会であった」はず。
 - 朝鮮半島での韓民族の反乱の厳しさで、自国の出先機関である帯方郡・楽浪郡の存在が脅かされる状況が有り、大きな兵力を動かすことが出来ず、軍事支援に留めざるを得なかったと推定する。
 - これは、冷静に外交関係を見ると、倭国にとっては、有り得ないほどの幸運であったと云える。
- ✓ 上陸後邪馬台国へのルートは可能性の一つを示したが、今回は、これ以上の論議は行わない。別途、機会を設けて、論議できれば、幸いです。